

## ハートのあなからなにみえる？

「お、いい天気」

公園のはし、いつもの場所に停めた車の中で、こねた生地を片手に窓を開けると、公園の緑に陽が当たってきらきらしてるね。

「こりゃ、乾かないうちにはいかないよ。」

「そんじゃ。せえ、のお よつ」と

投げ上げた生地は、さっきピカピカに仕上げたばかりの屋根の上に跳んでいった。屋根に乗つかると軽い音を合図に、機械の動く音が聞こえてくる。

「よーしよし」

生地が機械を通って、ゆっくり降りてくる。形作る音、穴をあける音、揚げる音。また一日はじまつたなあって思う音を聞きながら、トッピングの確認していると、コロコロって軽い音がやってきた。

下まで転がってくる前に、オレは受け皿を置いた。

木の受け皿は商品用じゃない。最初の2、3コはお客様には出せないからなあ。真っ黒だったり、ゆがんだり、穴がうまくあいてなかったりしてうん？

2コ目に出てきたドーナツ。オレはなんとなく手にとって、

「おお♡」

思わず、ささげ持った。

ちよつと焦げてはいる。全体の形もまんまるじゃない。だけど、きれいにあいたこの穴！まるで、磨いた窓じゃないか

オレは手早く受け皿を大きいのに取り替えて、また2コ目のドーナツを手にとった。

サングラスを跳ね上げて、しばらく、穴の向こうの公園を眺めてみる。

だんだん緑が薄くなる木陰。犬の散歩している子供に、ジャージでランニングしてる若い。並んで体操してる、もう少し古いの

「こりゃあ、あれだな。え」と

「なんつたつたつけな？ お嬢ちゃんがいつも言ってる ああ。」

「『幸せ、グッドだよ』だな。くは♡」

\*\*\*\*\*

「はあ」

朝の商店街を歩きながら、あたし、またため息ついちゃった。

顔の前には、だんだん熱くなってく地面。前向いてたはずなのに、いつのまにか下向いちゃってるよ。だめだなあ、って思うんだけど。久しぶりに、学校みんなに会えるっていうのにさ。

でもね、うん。

「せつなつてばもあ ていつー！」

思わず、ポーンと蹴り上げたら、スカートがなんかガサガサいってる。なんか入れてたっけ？ んーっ

と メモ？

「せつな、図に丸印、ブッキー なにこれ？」

あ。

口に出してから思い出した。昨日ブッキーから電話かかってきたんだっけ。せつながどうとか まあいいや。学校がっこうの休み時間にも連絡しよ。

まあ、それはいいんだけど。でもなあ

「お嬢ちゃんじょうちゃん。ドーナツいかが？」

あれ？ いつも聞いている声 って、頭上げたらドーナツ持ったかおるちゃん。いつの間にか、こんなとこまで来てたんだ。階段までのぼってるのに、気がつかなかつたよ。

「朝ごはん、しっかり食べたあ？」

いつも通り、のんびりした声。いつもだったら飛びつくんだけど、けど

ダンッ！

ひとつだけ出てたテーブルを、あたしは思いっきり右手で叩いた。

「ちよつと、聞いてよ、かおるちゃん!」

「んー? なーに?」

けど、やっぱりかおるちゃんのはの〜んびりしてて、なんか昨日のせつな思い出しちゃう ええいつ!!

「登校日だし、学校のみんなにも紹介したいからさ、せつなも一緒に行こう、って言ったんだよ!?」なのに、『関係ない人が学校に入っちゃダメでしょう?』だつて。あたしの友達なんだから関係あるつてのに、『規則は規則です!』だもん。まーったく、せつなつてば。へんなどこ固すぎなんだよ。ホント!!」

はあ。一息で言い切つたら、少しスツとしたけど、まだおなかの奥がもやもやしてるなあ。

ん? あれ? ぱちぱち、って音?

「物まねつまいねえ。今度、タルやんの代わりにショーやらない?」

「かおるちゃん!」

あたしがどなって近づいたら、かおるちゃんの手がひらひらやってきた。

「あはは、冗談冗談。まーね、くだらなく見えても、だれにでも守りたい部分はあるもんよ。」

進すすだけじゃあヤマトは進すすまないつてね。くは「あたし、おもわずそのままイスに腰掛けちゃつたよ。朝から力が抜けるなあ」

「いつもに増してよくわからない」

「あ、わからない? わからない、か ま、オレも見たことないんだけどね。げは」

あ、あはは

笑いが乾いているのが自分でわかるなあ。でも、かおるちゃんの言葉は力が抜けるだけで、疲れはしないんだよね。

「『守りたいもの』か そつかもね」

力が抜けたら、頭の中がふわつ、ときれいになった感じ。帰ったら、せつなにちゃんとあやまろうつ。

紹介は、またどつかでやればいいのか。

「ありがと、かおるちゃん。じゃ、学校遅れるから」

って言いながらイスから立ち上がったあたしの前に、中身の詰まった紙袋が出てきた。

「ぺたんこカバンにも、ごはんあげたら？」

あはは。なに言ってるんだろ。きょうは教科書いらないけど、お弁当入ってるからぺたんこじゃないのに。

「帰りに寄るからいいよ。またね、かおるちゃん」

あたしはそのまま駆け出した。まだ間に合うけど、なんかみんなに早く会いたい気分。会って、せつななこと、話したい気分。

背中から、持ってた方がいいよ、って声が追いかけてくるけど、ま、いっか。

\*\*\*\*\*

「ふう。ひとりなんて、久しぶり」

声に出していることに気がついて、私は思わず手を口に当てた。広い公園の中で、誰も見てるわけないんだけど。

でも、ほんとに久しぶり。ここしばらく、家でも外でもラブと一緒だったものね。

ラブったら、登校日に学校にまで連れて行くところなんだもの。けじめはちゃんとつけてもらわなくちゃ。怒られるのは、ラブなんだから。

さて、と。ひとりで出てきたのには、一応目的があるのよね。

いつもみんなが寄っている、公園奥のドーナツ屋さん。あそこなら、ひとりで本を読むのにちょうどいいわ。

タルトもあとでお仕事に行く、って言ってたしなにをするのかは聞いてないけど。

そんなことを考えながら歩いていたら、ドーナツ屋さんもう目の前。

「なににしようかな」

階段を上がりながら、また思わず口に出しちゃったわ。でも半分くらいは決めているのよね。まえにラブと一緒に来たとき、車の中に見えたもの。

「イチゴと　レモン、かな？」

「おや。お嬢ちゃん、いらっしやい。ひとりは初めてだねえ。はい、ドーナツね」

ドーナツ屋さんの車の前、大きなパソルの席に座ったとたん、私の前にお皿が出てきた。

イチゴと、レモンのドーナツ。

びっくりして顔を上げたけど、店長さん、もう車の中に入っちゃってるわ。

私の目、しばらくドーナツと車の中を行ったり来たりしてたけど、

「ラブがおなじみなんだものね」

そう考えたら、なんとなく納得した。

それにしても、

「ひとりは初めて、か」

ちゃんと知ってるのね。私がいつも、ラブと一緒にいるってこと

(もう、せつななんて、しらないっ！)

その瞬間、心臓が止まるかと思った。

昨日、ラブが私に言ったひとこと。今朝、出掛けるときの怒った背中。いきなり、すぐそばで聞こえたから。いきなり、目の前に見えたから。

なんでだろう。ただちょっと、ケンカしちゃっただけなのに。ひとりなんて、さっきから何度も自分で言ってたはずなのに。他の人に言われるだけで、こんなに

(もう、せつななんて、しらないっ！)

目をつむっても、耳をふさいでも、ダメ。まだ見える、まだ聞こえるわ！

わかつてる。ラブと一緒に居すぎたのよ。もう、ひとりでなんて居られないくらいに。でも、でも

「ドーナツ、もひとつどーお？」

いきなり、ラブの背中が消えた。目の前には店長さんがひとり。ひとり！

「ひとり　ひとりは、こ、こわ、怖く」

なにを言ってるのか、もう自分でもわからない。勝手に取り乱して、わけのわからないこと言っ、店長さんにまで迷惑かけて

「はい」

え？

目の前に出てきたのは、ドーナツ。ただのドーナツなのに、私はしばらく、目が離せなかった。

「これ、オレの幸せ。貸してあげる」

「これ、つて　焦げたドーナツが、ですか？」

失礼なのはわかってるんだけど　渡されて手に取ったものは、どこから見てても、ただの焦げたドーナツ。これが、幸せ？

「うん。でもき、きれいに抜けてるでしょ、ハート」  
言われてみれば、まんなかのハートはとてきれいで。見ていると、吸い込まれるみたい。

「お嬢ちゃん、占いできるんですよ。なら、その穴から覗けば見えるんじゃない？　ま。ドーナツだからウラないけどね。くは」

そおつと、ドーナツの穴を覗いてみると、サングラスの顔が見えた。

「店長？」

当たり前よね。目の前にいたんだもの。でも　なんだろう、さっきまでの怖さが、ふっ、と消えちゃったわ。

「店長ねえ　なまえは？」

「かお　つと」

い、いいのかしら？

ラブもみんなも、気軽に呼んでるけど、私はまだ何度も会ってるわけじゃないし

迷っていたら、遠くから声が聞こえてきた。

「 つなちゃん」

振り向いたら、女の子がふたり。小さい姿が、だんだん大きくなっていく。ドーナツツの穴から、はみ出るくらいに。

「やっぱり、ここだったよ〜」

「何してるのよ、こんなとこで」

私はドーナツツをお皿に置いて、息切らしてるブックーの背中をなでてあげた。その後ではハンカチで汗をぬぐってるミキちゃんが、あきれた顔でこっちを見てる。

ああ、そうだわ。ラブと一緒に暮らしているとちよつと忘れちゃうけど、彼女たちも、私をひとりになんてしてくれないんだっつけ

「図書館で待ち合わせ、って、ラブちゃん言ってなかつた?」

胸がすうつ、と楽になる感じの中で、ブックーの聲が聞こえた。

「いいえ。私には、なんにも」

だから、ふたりが苦笑いしてるの、しばらく気がなかつたわ。

「ラブちゃんってば 登校日でつきあえないから、せつなちゃんお願い、って言ってたのにい」

え? ラブが なに?

「夏休みが終わるまでに、こっちの勉強、完璧に覚えてもらうわ。覚悟しなさいよ♡」

ミキちゃんが私の肩に手を置いて、ゆっくり誘導してくれる。なんだ、ラブも最初っから、私をひとりにする気なんてなかつたんだわ。図書館で、みんなでお勉強。それも前に聞いた『夏休み』らしくていいかもしれない あ、いけない!

「ちよ、ちよつと待って!」

目の端に、パラソルつきのテーブルが見えた瞬間、私はぱつ、とふたりから離れた。

「逃げようつたって、そうはいかないわよ」

「逃げません。 ラブじゃないんだから」

苦笑いしてるふたりを背にして、私はぺろつと舌

を出した。だいじなところでラブが絶対逃げないの、みんな知ってるものね。

\*\*\*\*\*

私はテーブル上のドーナツをそっと取って、そばに立っていたサングラスの人に差し出した。

「お返しします。幸せのドーナツ」

けれど、差し出した手の先には、壁みたいな両手のひら。あら？

「もっと見つけてからにしろよ。」

そんなときは、せつなちゃん用スペシャルドーナツと交換だ。げは♡」

そっか、やっとわかったわ。ラブがおなじみなんだものね。この人は。

私は、ドーナツをハンカチで包んで、ポシエットにそっと入れた。そのまま、ポシエットを胸に当てて、ひと呼吸して さあ、顔を上げなくちゃ。

「はい。いつか、お返しします。 かおるちゃん」

「かおるは〜ん。来ましたでえ〜」

わいがドーナツの車に乗り込んだんは、もうちょいでお昼になる、ちゅうとこ。ピーチはんたちピリピリとったさかい、ちよい遅あなってもうたわ。

「おう、ブラザー。元気かい？」

「あつたり前や。健康第一やからな。せやけど」

まわり見ても、だーれもおらん。

「んー。シヨールをやっててもシヨールがない。ぐは」

ま、まあ人の少ない時期やそうやからな。せやけど、

「あー、こらドーナツ食いそびれたかいなあ」

わいがぐちこぼしてもうたら、足元に、でっかい紙袋がやってきてん。

「ああ。この袋のならいくつでも食ってくれよ。作り置きだけどね」

なんや、紙袋に握ったあとついてるわ。誰かに渡



しそびれたんかいな。

「そのかわり、あまつたら後でラブちゃんといく、届けてくれないかい？」

「あー、なるほど。ピーチはんか。そう言や、家のテーブルの上に弁当箱おきっぱなしやったなあ。」

「おっしや、まかしとき。後で行ったるわ」

「言いながらさうそくドーナツつまんでどつたら、かおるはん、いきなり立ち上がってもつた。ん？」

「ところでブラザー」

「へ、なんや？」

「お客さんも来とらんちゅうのに、なにしてるんやろ、思たら、機械の陰からなんやコゲたドーナツ手に取って、」

「ドーナツの穴を覗いたら、なに見えるかねえ？」

「コゲドーナツ、お陽ひさんに透すかしてもつてん。なんや？ 穴からなにが見える、やて？」

「なに見えるて いつもと同じやろ。ただの穴なんやから」

「わいが答えても、かおるはん、公園のずーっと先の方見つめとん。」

「いつもと同じ？」

「なんやろ思てたら、サングラスかけなおして、いきなりコゲドーナツ、ジャリジャリ食いはじめたわ。」

「そりやそつだ。げは♡」

—おしまい—